

大龍柱の向き等について

沖縄総合事務局

前回復元における大龍柱の規模・形態等

- ・正面石階段の登り口にある阿・吽形の一对の大龍柱は胴体を柱に見立てて直立し、鎌首をもたげた形態をしている。文献によると、1509年に石高欄とともに正殿前に建てられ、その時の材料は輝緑岩(俗称:青石)であった。
- ・1660年の正殿焼失の際に破損、1671年に再建。1709年の正殿焼失時も被害を受けるが1712年頃に再現され、戦前まで存在。
- ・戦前の大龍柱は高さ約1.8mしかなく、「寸法記」の一丈二寸五分(3,106mm)と矛盾。これは明治期に駐屯した軍隊が大龍柱の胴体の一部を切り取ったためと伝えられている。去る沖縄戦で完全に破壊され、戦後はその残片を保管。
- ・「寸法記」には大龍柱が小龍柱とともに互いに向き合っている姿が描かれており、往時の形態として向き合う形で再現。
- ・材料は発掘遺物を根拠に細粒砂岩とし、写真、発掘遺物を基に石膏現寸原型を作製して具体的に形態を究明。
- ・大龍柱の高さは阿形、吽形共「寸法記」の一丈二寸五分(3,106mm)。(図-1)



吽形(向かって左) 阿形(向かって右)

写真-1 大龍柱

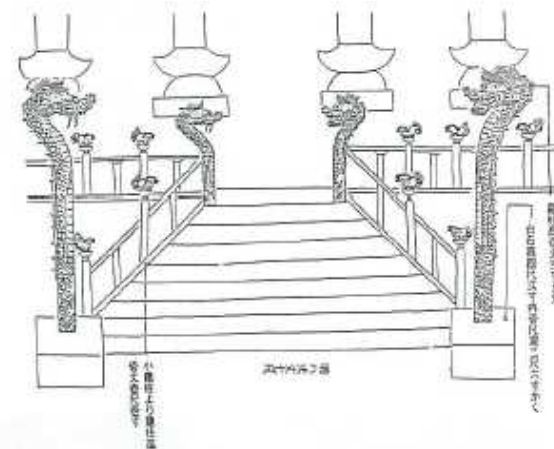


図-1 「寸法記」を調製
(文字は原文を翻刻)

【検討の方向性】

- 1877年にフランス海軍が撮影した古写真を新たな知見として位置付け、大龍柱の構成や向き等について検討を行う。
- 検討にあたっては、古写真解析のほか、大龍柱（高欄）の残欠検証、古文書・記録等の既往の文献や史料による総合的・多角的な検証を行う。

【検討の体制】

- 専門的な集中検討を行うために、首里城復元に向けた技術検討委員会の彩色・彫刻WGにその作業を位置付け、機動的な対応を図る。
- 必要に応じ、歴史や考古、建築、工芸等の外部の各専門分野の方々の協力を得ながら、新たな情報の発掘も進めていくこととする。
- 検討の成果は、彩色・彫刻WG会議及び技術検討委員会において報告し、調整する。